会議議事録

|  |  |
| --- | --- |
| 事業名 | 令和元年度「職業実践専門課程等を通じた専修学校の質保証・向上の推進」Ⅰ．教職員の資質能力向上の推進　（ⅱ）教職員研修プログラムの構築事業 |
| 代表校 | 一般社団法人全国専門学校教育研究会 |

|  |  |
| --- | --- |
| 会議名 | 第3回学習評価研修WG |
| 開催日時 | 令和元年9月24日（火）14:00～17:00 |
| 場所 | リファレンス駅東ビル貸会議室【5F V-5】 |
| 出席者 | 委員：岡村慎一、近藤賢宏、植上一希、小田茜事務局：飯塚正成オブザーバー：疋田、丹田（合計5名） |
| 議題等 | １．基礎編の開発について（１）岡山研修（基礎編）について〇植上より・高知から大幅に内容を変更。高知ではテキストに修正点が多数見つかる。また流れの悪さもあり。そのため岡山ではパワポのみで実施。講師はシンプルに流れたのではと思っている。1時間目は佐藤が担当。2・3時間目に植上。P. 70から3時間目。応用編の議論とも関わるが、高知では診断的評価のワークを行ったが、岡山では非認知能力の評価をどうするかというワークを取り入れた（レジュメ参照）。ワーク7では、各コースのグループで、必要となる「コミュニケーション能力」の分類等についてワークを実施。保育系の専門学校の方がつくるものとゲーム系の専門学校の方がつくるものとは異なる。それを教職員がどう意識しているかについても、議論が活発だった。まずまず成功か。基礎編全体としても締まりがよかったのでは。○飯塚より・非常にグループ慣れしている・研修を通して評価がなかなか難しいものであるということ、PDCAのCが大切であることに自覚的に。そしてAで各専門学校の特性を活かした独自の取り組みを展開していくという流れができている。→現状成功、もう少し上を目指す。○植上より補足説明・1時間目の内容を2時間目に取り込んでいたため、情報量が多くなってしまっているが丁寧に工夫していけば改善可能。・3時間目は指摘に即して改善。同様に改善可能。○全体意見・岡山は1月に管理者24名に3日間の研修を行う予定。3月に教員全員でキャリア教育について。今回のテーマはその総復習になる。・総括的評価の説明、「ある1つの授業やユニット」の評価はどうなのか。形成的評価なのでは。→佐藤さんの狙いとしては授業単位での総括的評価。→この流れの中でスライド57枚目の例を出すとこれまでの意味合いと変化してしまうのでは。・補助資料等、その都度政策動向に合わせて改訂していくというのは必要だと感じる。・ワークの時間に余裕を持つ、ワークのまとめを丁寧にしてもらう（スライドで例示を出してもらう）といいのでは。・基礎編に出てくる重要なキーワードを振り返って学習できる構造だと（補助教材）。→配布資料を作り直す必要がある。（２）基礎編の完成について○全体意見・昨年度終わったものについては継続して。この事業は研修というプログラムで、年1回は最低実施。その際のバリエーションとして，基礎編・応用編を一緒に？あるいは別々？ 2日間で7、8時間。・できるならばeラーニングのコンテンツと併用したい。別の事業で、12月16日・17日に効果測定に関する研修を佐藤さんと山口大の林氏に。アセスメントの有効活用の方法。評価と測定の違いを意識している教員は少ない。→そのなかにこの研修も位置づくのでは。・アウトプットについては予算との兼ね合いがある（オールカラーは予算的に厳しい）。その後使いやすいものを。各学校でカスタマイズできるものの方が利用しやすいのでは。セクションごとにファイルを分けたpptに。→体裁について、テキスト型は古い。紙焼きよりもHPからダウンロードできる形式の方がいいのでは。全専研を窓口にするが、どこに問い合わせるのか、というところ。・社会事業大学院大学。ここが実務家教員の養成について文科省の事業の委託を受けている。営利主義のため少し嫌な感じがする。・アンケートは事業報告の際に有力な情報源に。次回はあるとよい。→岡山の分は10月4日に高岡先生に確認。高知の分については次回共有。２．応用編の開発について○小田よりYIC・麻生調査資料について説明○植上よりKBC調査資料について説明○全体意見・KBCに沿いすぎて他の専門学校でおこなう場合に展開可能なのか。→KBCのインターンシップとその他の学校では違いがある。先行事例で紹介していくといいが、モデル事業であるということに意識的に。・教員は検定と就職を気にしている。だが、就職した先の満足度（顧客間でのコミュニケーション）の観点が抜けてしまう。・時間的にも3時間で実施不可能なのでは。・非認知能力にアプローチするのは専門学校教育にとっての肝。職種、地域特性などによって異なるので、それが表現しにくい、というのがこれまで。それをあえて表現するのであれば、こういうプロセスで、「うちがいう非認知スキルとは…」であると言い切ることが大事。それを具体的に評価する軸・観点としてこういうことを使えば評価できる。まずはこれを出しましょう。そうすれば、これはどう評価するのかといううちなりの評価基準を決めましょう、と。このプロセスを作っていくと、非認知スキルというのが評価できますよね、と。評価するプロセスがあると汎用性がある。ロジックや手順が明確化されると受講者もわかりやすい。→その手順のマニュアルを作成したい。・ヒアリング中で、教員は「こういうことができたらいいんだよね」という。しかし，それを言語化しようとするときに、「非認知スキルとしてそれはこういう能力ですね」とは言えていない。それを言語化していく。それを具体的に測定するためにはどういう行動を見ると、「こいつはできている」と。そこを見る。そうすると、ルーブリックを作ったり、A・B・Cの基準で評価を…ということが考えられる。そんな風に言ってくれると「なるほどね」と思う。→YICとircを軸に上記のエッセンスを入れていく。→「マニュアル化することがいいのか」という意見が出る。こういった齟齬に丁寧に向き合った研修の展開をする必要がある。インタビューのなかで明らかになることも。・方法論でとどまるのでは。→ルーブリック評価の認知は低い。しかしながらこういった観点は必要となる。例としてどれか1つを作ってもらう、というところまで。・学校行事の狙いがなかなか明確になっていない、言語化されていない、考えられていない部分がある。その狙いを教員側が言語化し伝えられるようになる必要がある。明確に区別して教育プログラムに落としていくとディプロマポリシーにつながっていく。学生にも伝えやすくなる。→ircを正解にして提示する形にしてもいいのでは。→KBCプロトタイプの結果をたたき台にしてYICプロトタイプで調整。→職業実践の例としての専門学校として（ircの名前を出さずに）。・就職を目的とした実習が専門学校のスタートではあるが、そうはいいつつ、学生が成長するためにそのステップをどう使っていけばよいかを模索しながらやっている。それを一方的に企業側の評価だけで評価するのも、主導するのは学校側だし、学校側も企業側ではできない評価ってなんだろうということが考えられる。・それが進んでいるところと進んでいないところの差（例えば分野ごと）がある。病院がダメと言われれば単位も落ちる、というように。分野ごとの矛盾点を感じるので、それをオープンにしていきたい・地域差も大きいため、様々な事例をみてもいいのでは（首都圏についても）。・厚労省の研修。内部監査と評価がテーマ。受講者と習得度が「評価」。それ以外の「評価」とは？職業訓練サービスをやっている機関を評価するとは？など。出てこないがそれでは内部監査ができない。 ・長い目線でのモニタリングが必要。ただ作るだけではなく、使ってみましょうというところのリアクションが重要。加えて、どう効果があったのか、と。それがあって研修が終わる・リライトしたシラバスがどうなったのか、使ってみてどう変化したのか、効果は、というところまで行かないと結論が出ない。エビデンスがないものになってしまう。もう一度フィードバックしていく、全専研でアーカイブ的（シンクタンク）なものを作ることができれば。・「ボランティア」という言葉をどう定義するのか。→実習応用科目として「ボランティア」。実習応用科目という点を出した方がいい。地域連携活動等、要相談。・無償化の件で教員は評価の必要性を感じている。研修の時間については相談。 →応用編については10月8日の事業推進会議で再度相談。３．今後のスケジュール・10月8日：事業推進会議・10月28日（10時～13時）：作業WG→応用編の作り直し、検討。・11月：KBC実施→KBCをふまえてYIC実施・1月20日：全体WG |

以上